

りよくえん  
緑縁

mary-melly

## プロローグ

---

(夢喰いバクが出ると聞いた)  
(この町に夢喰いバクが出るらしい)

風たちがそう囁いた。  
この町と言いながら、その風がいるのは西の町でバクはそこに出るらしい。  
バクというのは中国から伝えられた伝説の動物.....だったか。

「いい夢を喰われるのか？」  
(いや、悪いのを喰われるそうさ。どうだ、面白いか?)

耳元で蠅が語る。  
(面白かろう?面白かろう?)とぶんぶん飛び回る。

「悪夢なら退治する必要はないだろ」  
(んー。それはお前しただいさ、犬糞。使おうと思えば利用価値はある)

首に巻いたオコジョが言う。

「使い道？」  
(いい夢を売り歩けば金になる。そのうち信者がついて.....)  
「よし、いらぬことがわかった」

するりと背中に回ったオコジョが地面に降りた。  
そのままわき道へと消えていった。

「バクねえ、いいことしてるならほっとくかな」

ぽかぽかとあたたかい日差しの中、俺は空をぼーっと眺めた。

# 眠れる町 1

---

(犬権、西の町に獺がいる)

「この前聞いた。何か進展でも？」

何も知らなかったのか蚊はどこかへ消えていった。

首筋を吸われたらしく、少しむず痒い。

「ちっ、吸い逃げされた」

首筋を擦りながらポケットに入った紙切れを取り出す。

【冷】と書かれた紙を痒くなり始めた場所に貼る。

「ふう、蚊に刺されは冷やすのがいいんだよな」

(そんなこと聞くな、鬱陶しい。常識だろ)

口の周りを少し赤く染めたオコジョが答える。

何かを食べているのか口が動いている。

「何食べてんだ？ネズミ？」

(いや、そこらへんにいた虫だ。ネズミならもっとマシな味がする)

ああ、その口についた赤は俺のなのか。

そう考えたらそのオコジョがとても気色悪く感じた。

(虫に鉄分あるのか？鉄臭いぞ)

「いや、それ俺の血。蚊、食べたろ」

オコジョが眉間に皺を寄せる。

先月まで俺を食うことしか考えてなかったやつとは思えない顔だ。

「そうだ、さっきまた西の町の話聞いた。何かあったのか？」

(西の町？ああ、夢喰い獺か。我輩は知らん)

興味なさそうにプイッと顔を背けた。

丁度周りに教えてくれそうなやつがいない。

「クダン、夢喰い獺ってどんななのさ？」

オコジョに化けたクダンに問いかける。

肩に乗ったクダンが面倒くさそうにこちらを睨みつけた。

(そんなことも知らんで祓い人を名乗ってんのか、バカめ)

「仕方ないだろ。師匠に教わる時間なかったんだから」

(なんのための情報だ。聞けばいいだろ、バカめ)

二回もバカ呼ばわりされてむかついた。

でも、反論できなかった。

クダンの言ってることは間違っていない。

(夢喰い獾はその名のとおり夢を食べる。良い夢悪い夢、両方食べる。いろんな夢を食べるために、いろんな地方を歩き回っているらしい)

「姿は？」

(確認されたことがない。実体があるのかもわからない)

クダンは淡々と説明した。

俺にもわかるように簡単な言葉を使うため、すごくわかりやすく聞こえる。

そんなことを考えながらそばにあった木から桑の実を取る。

まだ赤い実が多いが、中でも一番黒くなった実を選んだ。

「あれ、いろんな地方を歩き回るくせに俺のところに来る情報は全部西の町だな。偶然か？」

(いや、どうやら居座ってるらしい。そんなに人の多い町でもないのに、何が惹きつけたんだか)

「居つくとうどうなる？」

クダンは爪をたてた。

肩にめり込んですごく痛かったが、血が出るほどではなかった。

この程度で声をあげたらクダんにまた怒られる。

(前例がないからな、ここからは想像だ。獾が良い夢ばかり食べ続ければ、その人間は眠れなくなり気を病むだろう)

「それは想像がつくな。逆は？」

(逆は、目覚めたくなくなるだけだろう。簡単なことだ)

話し終わるとクダンは爪を引っ込めた。

きっとまた跡がついてるのだろう。

いつものことだ、わかっている。

「目覚めたくなくなるってどういうことだ？寝たら起きるだろ」

「起きるだろうな。だが、夢に囚われたやつが現実で苦労したらどうなる？夢に逃げるだけだろう。一日寝て起きるだけの生活じゃ人は生きられんよ」

人間とは面倒な生き物だ。

かれこれ10年以上人間をしているが、生きるためにしなきゃいけないことが多すぎる。

動物と違って食べて寝るだけではダメなのだ。

本当に困ったものだ。

「つまりは起きない町になるわけだ」

(そういうことだ。まあ、仮説だけだな)

納得した俺は足を止める。

リュックの中から三本針の方位磁石を取り出す。

「じゃあ西の町行ってみるかな」

(ここからは西南西だ)

「OK、こっちだな」

一本道から外れた藪を見る。

周りに誰もいないのを確かめてからその中へ入っていった。

## 眠れる町 2

---

「結構遠かったんだなあ、西の町」

体中についた葉や枝を落とす。  
絡まっているわけではないからすぐに取りれる。

「あいつら機嫌悪すぎ。座り心地最悪なのにこっちが怒られたぞ」  
(そっちはまだいいだろ。我輩を見ろ、唾吐かれたんだぞ。あやつら何様のつもりだ)

怒りに顔を赤くしたクダンが俺を怒鳴りつける。  
俺を怒鳴っても何も変わらないのに。

「まあまあ、抑えて抑えて」  
(お前は吐かれてねえからそんなこと言えんだよ。このネバネバ最悪だ)

前足で顔中についた液体を剥がそうとする。  
ぺちゃぺちゃと落ちた液体が肩に貼りつくが文句は言わない。  
文句を少しでも口にすればクダンの倍返しにあうだろう。

「おや、おまいさん。旅人かね？」

振り向くとそこには老婆がいた。  
黒いフードでも被っていたら魔女のようだ。

「昼間に来るなんて珍しい。気違いかね？」

いきなり気違い呼ばわりした婆さんは地面に唾を吐いて町の中へ戻っていった。

(愛想のない婆さんだな)  
「歓迎されてないってことかな」

後ろ頭をぼりぼりかいた。  
西の町のゲートであるアーチはつる草に巻かれ、手入れされてないのがわかる。  
レンガが敷いてある道も薄っすらと砂に覆われ、人が歩いた様子がない。

「これは……」

(眠れる町か)

鳥が一匹も飛ばない空にただただ雲が浮かんでいた。

さっきの婆さんがまだ道を歩いているが、それ以外に人はいない。

砂にも一人分の足跡しかついておらず、しばらく人は歩いていないようだった。

(どうすんだ?)

「情報を集めるしかないだろう。まあ、先に宿探しするけど」

真っ先に探すべきは宿。

もし本当に眠れる町で、宿主が眠っていたらそれだけで野宿となる。

宿屋を目の前に野宿とか最悪すぎる。

町の中に足を一步踏み入れた。

ふわっと砂が舞い上がる。

「どれくらい前から獺は住み着いてるんだろ？」

(3年かな。人間が崇めたりするから調子に乗ってるんだ)

そばを通り過ぎるトラ猫が言う。

俺をちらりと睨んだトラ猫はそれ以上何も言わずに消えていった。

(3年か、長いな)

「引き剥がすのが大変そうだなあ。住民の反対とかで」

夢喰い獺を崇めたってことはそういうことだろう。

どこかを祀ったことで良い夢ばかり見られるようになった。

だから崇め続けていて、獺はそれをいいことだと思っている。

そんな状態で獺を剥がしたりしたら大きな反発が起きる。

目に見えていることだ。

(封でもしとくか?)

「なんでまた？」

(良い夢はこの観光資源なんだろ？だったら人を減らすために追っ払った方がな)

「なるほろね」

クダンの言うことは一理ある。

だからと言ってすぐに行動はせず、町の中を眺める。

どんよりと暗い活気のないこの町にどれだけの観光客がいるのかわからない。

夜来て朝帰る客がどれだけいるかわからない。

急激に来客が減れば町の人に疑われるだろう。

一度疑われるとそれを塗り替えるのは難しい。

なるべくならそういうのを避けたいものだ。

「しかし、気持ち悪い町だな。風一つ吹かない」

(風まで眠ってんだろ)

「情報が流れて来難そうだな」

独り言のように小さく呟きながらぐるりと周りを見回す。

山々に囲まれぼつんと存在する子の町は人がいないとすごく鬱蒼としている。

人と一緒に町も眠っているのかもしれない。

そう疑わせるほどどんよりと生暖かい空気だった。

先ほどの老婆もどこへ行ったのかわからない。

歩けばふわっと砂が舞い、域を吸い込めば喉にざらついたものがくっつく気がする。

町の中を一日中歩けば体中が砂まみれになるだろう。

「クダン、明日まで外に出ていてくれないか？」

(ふん、我輩は茶色くならんぞ)

「そうか、残念だ」

いつもならケラケラ笑う冗談も、町の雰囲気飲み込まれる。

笑いさえも眠っているようだ。

「お兄さん、何してんの？」

細いわき道に少年が立っている。

陰になっていてよく見えないが、十いくかいかないかの子供。

「子の町に宿はないよ。あったとしても眠ってるさ」

俺が考えた最悪をさらりと言う。

顔の左が見えない。

「お兄さんも陰陽師？夢を払ってくれたりする？」

(陰陽師？仏の話は嫌いだ)

クダンは顔を歪めてから肩を降り、少年とは逆の方向へ去っていった。  
俺はそれを見送ると少年のほうに向き直った。

「ごめんな、あんたの猫。どっか行っちゃった」

「かまわないよ。あれは自由が好きだから。すぐ戻ってくるさ」

もう一度クダンのことを見ようとしたがすでに見えなくなっていた。  
俺のことを不審そうに眺めながら少年は暗い道から出てくる。  
顔の左を隠した少年。

「さっきの話に戻るが、宿屋はないのか？」

「ない。元々この町に旅人が来ることなんてなかったんだ」

まあ、こういう町はどこにでもあるだろうからなあ。  
特産品でもないかぎり宿屋を作る必要がないだろう。

「夢で旅人が増えただろ。そういうやつらはどうしてる？」

「町の中で野宿さ。夢の力は町の中でしか効かないらしくてね」

目の前に家があるのに野宿。  
そんな思いしてまでいい夢を見たいやつらがいるのか。  
でもまあ、ないなら諦めるしかないわけだ。

「ところで少年。お前は寝ないのか？」

「寝ねえよ。寝たくない。寝てやるもんか。あんなニセモノの幸せなんていらねえんだよ」

口を尖らせ強がるように何度も繰り返した。

「お兄さんは見たくて来たんだろ？」

「いや、興味がなくはないが見たいとは思わないな。ニセモノならな」

少年に笑いかけると、少年もニヤリと笑い帰したきた。

少年に袖を引っ張られながら川へ歩いていった。  
コロコロとした石の上を歩く。  
さんだるの中に小石が入って足の裏がくすぐったい。

「よし、このあたりだな」

袖から手を放した少年はぐるりとまわりを見回した。  
俺も真似して見回す。  
綺麗な川が流れている森。  
町からはそんなに離れていない。

「町と森の境。このあたりは夢を見なくてすむんだ」

「へえ、ここで寝たのか？」

初年はこくんと頷いた。  
履いていた草履を脱いだ少年は川の中へザブザブと入ってゆく。

「冷たくないか？」

「冷たい。でも気持ちいい」

俺に向かって少し笑いかけると少年は川の中を覗いた。  
何かあるのかと俺も見る。

「何もないな」

「もう何もいないんだ。町みんなが全部取って保存食にしたから」

「保存食？」

少年が下を向く。  
ジャバジャバと川の水を蹴った。

「寝て起きるだけじゃ生きられない。だから狩りの手間を省くために魚を全部捕まえたんだ」

「全部？」

「全部。もうここに魚は寄りつかない。一匹も来ないんだ」

魚も警戒したのだろうか。

いや、警戒ではないか。

魚は産卵の時、自分の生まれた川に帰ると言われている。

つまり、この川で生まれた魚を全て捕まえてしまったということだ。

「帰ってくる魚がない……か」

「魚だけじゃない。蛙も虫もみんないない。夏なのに蝉すら鳴かないんだ」

少年に言われて気付いた。

そういやまったく蝉が鳴いていない。

犬権に話しかけてくる虫、動物もいない。

いつもこういう寄りつく場所にはいるはずなのに。

「なるほどな。被害は深刻だな」

「助けてくれる？」

「んー。できるかぎりな」

俺の答えに少年の顔が満面の笑みに変わる。

顔の左側は相変わらず見えないが、それすら気にならないほど明るく温かい笑顔だった。

「俺、ヤマキ。お兄さんは？」

「犬権だ」

まだ川のそばにいる。

夢喰い獺の被害を一通り聞いて悲惨なのがわかった。

町の住人はヤマキを抜いてほとんどが眠り、食料は蓄えが尽きるまでかなり時間があるらしい。

外から来る旅人も興味だけでなんの対処もせず帰っていくそうだ。

「半年前に陰陽師って名乗るおっちゃんが来たんだ」

「陰陽師？」

「うん、夢を封じてやるって一週間くらいここにいたけど結局なにもできなかったみたい」

まあ、そりゃな。

陰陽師には専門外だろう。

「犬権は陰陽師じゃないの？」

「残念ながら。まあ、やってることはそう変わんないんだがな」

陰陽師は仏や神を信じることでその力を借りていると言われている。

それと違って俺は、己を信じ己の内なる力を引き出す。

他人に頼れないし、誰にも教われないという素晴らしいくらい面倒な力だ。

「強いのか？」

「んー。いろんな意味で強いが、いろんな意味で弱いね」

俺の曖昧な答えにヤマキは頭にはてなマークを浮かべた。

俺自身にすらわからないことをこんな子供にわかったら驚きだ。

「聞いていいか？」

「なに？」

「顔、何かあるのか？」

ヤマキは顔の左側を触った。

「別に話したくないなら……」

「これはニキビだよ。人より少し大きいから隠してるんだ」

ヤマキは苦笑いしたまま隠していた部分を見せた。

左目の下、場所は泣きボクロができるあたりだろうか。

ニキビにしては大きい出来物があった。

「ああ、なるほど」

「これ見せるとすげえ顔されんだ。だからいつも隠してる」

ヤマキの了承を得てから出来物に触れる。

やわらかいわけではなく、中にしこりがあるかのようにコリッとしていた。

犬櫃には思い当たりがあった。

出来物の先が少し黒ずんでいて、押すと逃げるようにずれる。

それは正しく犬櫃が思い浮かべたアレだった。

「こりゃ、アレだな。ニキビじゃねーよ」

「ニキビじゃない？じゃあ、なんだってんだよ」

「こりゃ、卵だな。なんの卵か知らんが卵だ」

犬櫃の言葉にヤマキは固まった。

虫は人を産卵場所にしない。

しかし、妖精や妖怪などまだ得体の知れない生物たちは存在している。

この出来物の中にそういうやつらの卵が入っているのだろう。

それも羽化直前の……。

「卵ってことは生まれるの？」

「ああ、見えないものがそこに卵を産んだ。時間がたてば生まれるだろう」

「その生まれたものから害はないの？」

ヤマキは不安そうな顔をした。

でも犬櫃には「ない」と言い切れなかった。

人間の中で羽化するものがあり、犬櫃もそれに出会ったことが過去にあった。

そのときは対処できずに羽化してしまい、たまたま運良くなんの被害もなくことが済んだ。

あれはあくまでたまたまの話。

毎度そういうわけにはいかないだろう。

「ヤマキ、風がたくさん吹くところを知らないか？」

「風？」

「虫でも動物でもいい。たくさんいるところはないか？」

突然の質問にヤマキは慌てて頭を使った。

普通の森ならいなくもないが、近くの町が眠ってるおかげで場所を選ばなければならない。

「こっからもっと西に谷があるんだ。そこならどう？」

「ここから遠いか？」

「いや、一時間くらい」

太陽の位置からして今は二時から三時の間だろうか。

生き帰りの往復で二時間。

夏場なので七時くらいまで明るいだろう。

「よし、谷に案内してくれ」

「谷なんてなにもないけどいいの？」

「かまわない」

ヤマキを急かすように背中を押すと不満そうな顔のまま道案内を始めた。

山の中、一言も喋らずに歩く。  
急な坂、滑る土のおかげで歩くことに集中させられる。  
呼吸を荒げ、二人のせえはあの音しか聞こえない。  
周りを見渡すと木ばかりで、どこを目印にして歩いているのかわからない。  
一人で来るのは無理そうだった。

「そろそろか」

「よくわかったね。あそこ超えたら谷だ」

ヤマキが指差した方を見る。  
目標が目の前に迫っていた事がわかる。  
風の声も囁くように聞こえた。

「ほい」

先に歩いていたヤマキが俺に腕を伸ばす。  
俺はその手を取った。

「よっ」

ヤマキが俺を引き上げる。

「サンキュ」

笑って言うと山木も笑い返してくれた。  
ヤマキから目を放すと谷が見えた。  
吊り橋がかかっているが、つる草が橋を覆い尽くしている。

「橋は渡れないよ。つる草が絡まってよく見えないけど、おんぼろなんだ」

遠目からでは蔓しか見えずわからない。  
忠告がなければ落ちるまで触ってしまっただろう。

「ヤマキはここにいろ。危ないから」

「別に谷の際まで近づかなきゃ大丈夫だよ」

「いつものことだし」と余裕な顔をしたヤマキを腕で静止した。  
子供の体じゃ強風が3つもきたら飛ばされるだろう。  
しかし、ヤマキに説明した所でわかってはもらえないだろうし。

「いいや、ここに座れ」

「え、ここ？」

「俺が独り言し始めたら絶対に声かけんなよ」

変に面白がられていたずらされると面倒だ。  
すぐそこの木に引っかけられたら助けられる。  
が、谷の中腹にでも吊るされてしまったら助けようがない。

「よし、やるか。喋るなよ」

ヤマキにもう一度忠告した。  
ヤマキが口を閉じたのを見てから俺は谷に目を向けた。  
いるのはわかっている。  
さっきから数人の声が耳に入ってきているから。  
しかし目に入ってくる奴も、声をかけてくる奴もいない。  
だからどこにいるのかさっぱりわからなかった。  
こういうときは大きく息を吸って。

「おーい」

大声で風に呼び掛ける。  
急に声を出したせいか、ヤマキの肩がビクッとゆれる。  
それを無視して俺は風たちの様子に耳を立てた。

(今の誰？あそこの人間？)

(ああ、片割れが聞こえ人だわ。どうする？)

人間が嫌いなのか、声に嫌味が混じる。  
失敗だったか……。  
そんな気を起させた。

このまま風にさらわれ痛い目どころではすまないのではないか。

そんな気がした。

(あたしたち三人で力を合わせればあんな子供、谷底にひゅるりだよ)

(それは谷底の川を流れる水殿に迷惑が。それより落ちない程度に吊るした方が.....)

風たちの相談が俺の耳まで届く。

ヤマキとここを去った方がいいかもしれない。

そんな気持ちになった。

しかし、ヤマキの顔にできた出来物は羽化寸前なのだ。

ここで帰ってしまったらヤマキが助けられる確率がぐんと減る。

「ヤマキ、先に.....」

(我でよければ話を聞こう)

すぐ後ろから声をかけられた。

あまりにも気配のないそれに俺は冷や汗を垂らした。

「.....誰だ？」

(我は風だ)

風と言う事は俺にも姿が見えないと言う事。

この谷にいるということは俺たちにちょっかいを出しにきたか。

そう考え腰につけたベルトに手をかける。

(その必要はない。我はそちの味方だ)

「信用ねえぞ」

(そうだろうな。信じろとは言わぬ。あの若風たちの声を聞くがよい)

若風、すなわちさっきまでヤマキを谷に落とす計画をしていた風に耳を向けた。

(見て、あの風)

(え？あれは.....沼風？)

(やだ。沼風いたら手出しできないじゃん)

気に入らない様子がひしひしと伝わって来た。

「お前、沼風なのか」

(ああ、ここから少し言った所に沼がある)

谷底を流れる川の上流に沼があるのだろう。

若風の反応を見れば一目瞭然だ。

上位の風には逆らえないのだ。

「なるほどな。なあ、少し手伝って欲しんだ。いいか？」

(かまわぬ。その少年のことだな)

察しのいい沼風はふわりと風を作りながらヤマキの周りを回った。

(卵か。面倒なものを見つけたな、祓い人よ)

「見つけてしまったからには助けたいんだ」

(なるほど。対処法を知りたいのだな)

見抜いた沼風は俺の後ろに戻ると耳元で小さく囁いた。

(卵の切除は成功例があまりない。というのも、害のないものであれば放置でもかまわぬからだ)

「知ってる。経験者だ」

(なるほど。成功例が数少ない理由はもう一つある。それは祓い人の死だ)

ぞわりとした。

卵というまだ生れぬ未完成に殺される。

恐怖を感じた。

(卵の中にいるこれから出てくる存在は針でも刺してやればいい)

「それだけでいいのか？」

(ああ、だが卵の中には卵白のような実を守るものがあるのだ。それが厄介のようで、ほとんどの祓い人は放置するそう)

卵の中にいる生れぬ存在ではなく、それと共存するものが強力。

つまり針を刺した後が肝心と言う事か。

「卵白はどうすればいい？」

(祓い人よ、我から少しばかりの願いがある)

このタイミングでこの頼み方。  
交換条件というやつか。

(私のいる沼に少々おかしなやつがおる。その対処を願いたい)  
「対処法は？」  
(.....すまぬが、我も知らぬのだ)

沼風が悔しそうに言った。  
それなりの上位にいても知らない事はある。  
しかし、それを「知らない」と正直に言うのは悔しくて辛いことだ。  
そんな沼風に好感が持てた。

「いいよ。情報集めてできそうなら引き受ける」  
(情報が集まらなかったら?)  
「前代未聞かつ空前絶後の対処をしてやる」

にやりと笑うと沼風も笑ったかのように優しい風が吹いた。

交渉成立だ。

さっそく沼風が卵の対処法を話す。

(黒点が生まれてくるものだから、卵の黒点に針を刺す)

「OK、次」

(皮膚と刺した針の間からものが出てくるような)

俺はドロドロした何かを思い浮かべた。

(そのものは卵が生まれるまで共存し、守っているらしい)

「形は？」

(わからぬ。成功例が少なく、成功した祓い人は多くを語らぬのだ)

小さくため息をついたようで耳元をさらりと風が吹いた。

(対処法で一番多いのは塩だ)

「それはあれか？お祓いで使うやつか」

(いや、普通の塩だ。海水や塩水はダメらしい)

お祓いといえば塩だが、得体が知れなくても効くのだろうか。

それも清めた塩でなくてもいいだなんて、不安になる。

(塩で対処できる程度と考えれば安心するかね？)

「塩に負けるやつは弱いとでも？」

(さあな、死人が出てるのは確かだが強いのかはわからぬ。祓い人が油断しおっただけかもしれぬ)

たかが卵と考えたのだろう。

まあ、さっきまで俺もそう考えていたのだし、そういうものだろう。

(たかが卵、されど中身は得体の知れぬもの。気をつけるがいい)

優しく言うとびゅっと強い風となって去っていった。



「ヤマキ、もういいよ」

口を手で覆っていたヤマキに声をかける。  
何があったのかわからないようで、まだきょとんとしている。

「もう終わりか？」

「ああ、終わった。町に帰るよ」

俺はしゃがんでいるヤマキに手を貸した。  
持ち上げるようにヤマキを立たせる。  
体についた土を落とすと準備ができた。

「よし、行こう」

タイミングを見て声をかけると、ヤマキは大きくうなずいた。  
まだ谷の若風たちが小さく噂話をしていたが、聞こえないふりして谷に背を向けた。

「そっちじゃない。こっち」

ヤマキに停止させられた。  
来た道に向いたはずなのだが。

「行きと同じ道で帰るのは辛いから。こっちのほうが楽」

言うことだけ言うと俺をおいてずかずかと森の中へ入っていった。  
行き来た道も覚えていない俺はヤマキを追うしかなかった。  
行きも考えていたが、ヤマキはこんな入り口も出口もないような道を頻繁に使っているのだから。  
一言で言って危ない。  
怪我なんてのはしてなんぼだから仕方ないとしてもだ。  
ヤマキの顔についた卵といい、こんな森の中をずかずか歩けばいろんなものを引き連れてしまうだろう。  
これだけ自然が溢れている場所なのだから、それなりに集まりやすいはずだ。

集まりやすい地を歩けば引き連れてしまう可能性は高くなる。

害のないようなものが一つくらいなら問題ないが、大きいのだったり小さいのを引き連れすぎてしまえば喧嘩して害が出るだろう。

しかし、今のヤマキには卵以外、何も心配する場所が見つからなかった。

何か生きてるものがついていれば俺の耳に聞こえるはず。

つまりは引き連れていないのだ。

そう考えると、この少年もまた獾と似た不思議なものに見えてきた。

「なあ、犬権」

「なんだ？」

ヤマキの声で我に返った。

前を歩くヤマキは俺を見ずにひたすら歩いていた。

「あんた、聞こえ人だったんだな」

「ああ、それがどうした？」

「いや、なんでもない」

少し振り向いたヤマキの表情は硬かった。

まあ、こういう反応には慣れているからかまわない。

かまう必要はない。

「聞こえ人っていろんな声が聞こえるんだろ？」

「ああ、聞こえる」

「今も聞こえるか？」

何も答えない。

森の中にいるのだから木や土の音がする。

そこに住む虫の音がする。

それを狙う鳥の音がする。

答えなくてもわかることだろう。

「聞こえるってどんな感じ？」

「んー、生まれてこの方聞こえなかったことがないからな。普通としか言いようがない」

素直に答えてやるとヤマキは「そっか」と小さく呟いた。

「ヤマキは聞こえ人のこと、どう思う？」

答えにくい質問を投げる。

「んー、よくわかんない。町の人是不気味がるけど、俺にはよくわかんない」

足を止めたヤマキが真剣な眼差しで言った。

「ヤマキは町の人と一緒にあって俺を不気味がらないのか？」

「犬権を不気味だって思ったことはないよ。不思議だと思ったし、変わったやつとも思った」

そこで言葉を切ったヤマキはゆっくりと犬権のほうに振り向く。

「でも、それ以上に犬権はいいやつだから」

「いいやつ？」

「ああ。俺のこと助けてくれようとしたり、町を助けてくれようとしたり。犬権にとってここは関係ない場所なのにしようとしてくれてんじゃん」

少し悲しそうな笑顔を浮かべる。

「それだけで嬉しいんだ。ありがたいんだ。感謝しなきゃいけないんだ」

ヤマキは一度深呼吸をして。

「ありがとう、犬権」

まだ俺は何もできていないのにヤマキは礼を言った。

俺にも会って数時間しかたっていない人に感謝されることがあるのだな。

涙が出そうなのをきゅっと抑えると、心の中から暖かいものがあふれ出した。

「ちなみにさ、祓い人ってどんなことするの？陰陽師とは違うの？」

「んー、やってることは似てるが違う。考え方とかもろもろがな」

いつか興味を示してくると思っていた。

人数の少ない特殊な職業。

祓い人でない人はそう考えるだろう。

「陰陽師ってのはものを封じる。つまり、その場に留まらせて、力を弱らせるやつらのことだ」

「ふむふむ」

「祓い人ってのはその名の通り、居ついたり害を出してるものをぺっぺっと祓う仕事だ」

隣を歩くヤマキは頷く。

しかし、ちゃんと違いを理解しているわけではないだろう。

この考え方、モk的の違いがとても大きな問題だったりする。

十までに理解できなければ、払い人にさせてもらえないのが一般的だ。

「もう一つの大きな違いは力だ。俺は陰陽師じゃないから詳しくないが、神様とか仏様を信じているやつらが神様たちの力を借りるんだったかな」

「神様か……」

「祓い人の力は自分を信じ、自分の中に力があると暗示をかけると稀にできるようになる」

俺の話に興味津々に聞く。

わかりやすい違いを話してしまったので話すことはもうない。

森に異変がないか聞きながらまた歩き出す。

「他力本願と自己満足って感じか」

「ん？」

「いや、自己中心的とかは違うか。自己暗示、マインドコントロール、ナルシスト！！」

納得したように大声で自己解決すると、やっと理解できたとばかりに嬉しそうに笑った。

「どんな力か見せてって言ったら見せられる？」

「無理だな。陰陽師も祓い人も共通して、物事が起こらなければ何もできない。できるというや

つはただの口先野郎だ」

きっぱりと断るとヤマキはつまらなそうに口を尖らせた。

これ以上会話が續かなくて黙った。

ゆったりとした坂を上る。

このあたりなら町までズルして帰れるのだが、子供にズルを教えるのは気が引けた。

クダンならすぐにでも、一人でも探しに行くだろうがさすがに俺はできない。

「痛っ」

「どうした？」

「蛭に食われた」

腕に一匹の蛭が吸い付いていた。

蛭とは主に水田や沼地に生息する虫で、動物の血を吸って生きている。

「引っ張るな、血が止まらなくなる」

「え？」

「そのまま大人しくしてろ」

蛭は無理に剥がすと血が止まらなくなる。

山を歩くときの常識である。

蛭の苦手なものは火。

火を近づけたり、軽く炙ってやるとポロツと落ちて血もそこまで出ない。

つまり、今必要なのは火。

「腕を出せ」

ヤマキがy出を出す前にぐいっと引き寄せる。

それから胸ポケットから小さな紙、ズボンのポケットから油性ペンを出した。

「なにそれ」

「お前が見たがったもの」

小さな紙に【火】という字を力強く書く。

油性ペンを口に啞えて、蛭に紙を近づける。

「ひひほひはみへはいはらな（一度しか見せないからな）」

「え、なに？」

ペンを啜えたままだからヤマキには通じていないだろうが、かまわない。  
蛭のそばにセットした紙にもう片方の手を近づける。  
デコピンをするような指の形を作り、ゆったりと深呼吸。  
心が落ち着いたら掛け声。

「いち、にっ」

「さん」と同時に火と書かれた小さな紙を指で弾く。  
気の入った一撃は紙の先に火を灯し、蛭を炙った。  
蛭は素直にポロリと落ちた。

「すげー」

ヤマキの感嘆の声を聞いて力を抜く。  
口に啜えていた油性ペンを元の場所に戻す。

「ちょっと血が出たな」

ヤマキの腕から血が滴り落ちる。  
量は少ないものの血は止まっていなかった。

「これくらい唾つけとけば」

「黙れ。風の噂でも流されたらたまらんからな」

祓い人兼聞こえ人にとって失敗とは大きなものだ。  
どんなに小さな失敗も風や虫の噂で世界を飛び回る。  
知らないやつにゲラゲラ笑われて気持ち悪い思いはなるべくしたくない。

「そのまま止まってろよ」

さっきと同じ高さに腕を止めさせると胸ポケットに手を入れた。  
火をつけるには紙がよかった。  
治癒には包帯と同じ、つまり綿が効く。  
胸ポケットに入った何枚もの中から綿を選ぶ。  
油性ペンで【止】という字を書き、傷の上に置く。

指で押さえつけると布に血が滲んだが気にしない。

ゆっくりと息を吸って吐く。

「いち、にっ」

「さん」の掛け声で布を捲ると傷は綺麗さっぱり消えていた。

「おお」

「これでばっちりだな」

傷一つ残らない腕をすりと撫でる。

「祓い人ってこんなことができるんだな。すげえよ、犬権」

ヤマキが間隙の声を出したが、俺は聞こえないふりをした。

犬榧が山を下っているその頃、近づく犬榧の気配を無視して町の中を歩いた。  
町を埋め尽くす埃で視界が悪い。  
動物の大半も外へ出てるようで匂わない。

(なあんもねえな。腹も減ったし、犬榧が下りてきたら集ってみるか)

どんどん近づく犬榧の気配に小さく舌なめずりする。  
クダンとしてはあんな美味そうな香りを出す犬榧は隣にいただけで空腹の元だった。  
犬榧を狙ってくるものを食べるのがあたりまえに変わってきているが、やっぱり美味そうなのは犬榧だった。  
スンスンと鼻を動かす。  
微かに匂う犬榧の甘く食欲を誘う香り。  
それに混ざって匂う独特な匂い。  
クダンを誘う魅惑の香り。  
自分とは違う性別の……。

(ほう、誘ってんのか)

急に湧いた欲求をぐっと抑えて匂いを辿る。  
細い路地をすりと抜けていく。  
こういう道を好むってことは猫あたりか。  
相手の姿を想像しながら屋根から降りる。

(お前か、我輩を呼んだのは)

一匹の白猫にたどり着いた。  
大きな瞳にしなやかな体。  
猫の中でも別嬪な猫だ。

(呼ぶ?)

(ああ、匂いがな)

(ああ、なるほどね)

目を細めて笑うと猫は空を見上げた。

クダンが近くによったが、猫はそこから動かなかった。

嫌がられないようなので隣まで行き、座る。

(お前、一人か?)

(うん、一人。主は眠りにとり憑かれたから)

少し寂しそうに尻尾が動いた。

大きな青い瞳が緑に変わる。

(目、どうした?)

(さあ?いつからか変わるようになったみたい。私は主に言われるまで知らなかったの)

自分では色が変わったことに気づかないのだろう。

白い猫は目の色を直すかのように顔を洗った。

(不気味でしょう?)

(いや、綺麗だ。なかなか出会えない綺麗さだ)

心の中でガッツポーズをした。

今の台詞、女はきゅんとするだろう。

顔やポーズもばっちり決まったし、文句なし。

クダンは心の中で自画自賛すると、猫の尾に自分の尾を絡め合図を待った。

少し驚いた顔で猫が振り向く。

「残念で一した」

後ろから笑いをこらえた声をした。

聞き覚えのある声に、クダンは怒りを覚える。

(犬権、貴様.....)

(あらあら、お友だち?)

クダンの怒った顔を見て、さらに笑う。

猫も釣られてクスクスと笑っている。

「そう怒るなって。どっちかって言うと感謝されたいところだ」

(はぁ？感謝だと！？一噛みされてえのか！)

腹を抱えて笑う犬樞。

クダンの怒りを猫が「まあまあ」と抑える。

(怒られるべきなのは私です。この聞こえ人さんは悪くないですよ)

クダンを宥めるように言うと、猫は深々と頭を下げた。

「クダン、よく見ろ。彼女はオスだ」

涙を浮かばせるほど笑った犬樞はむせながら言った。

顔を上げた猫は恥ずかしそうに笑った。

(残念ながらオスなんです。オスにとって大事なものもついていますよ)

事実を確認させるために前足で隠れていた場所を見せる。

それまで怒りで赤く染まっていた顔がさっと青くなる。

(見た目がこれだし、喋り方もこうだからよく間違われるんです。気にしないでください)

慰めるように優しく言うが、効果はない。

どんどん困惑するばかりだった。

(こ、この匂いは？)

(私にもわからないんですが、目の色が変わるようになってからにおいが変わったそうで。仲間にも中性的な香りと言われてるんです)

犬樞には匂いがわからないようで首を傾げる。

(目に見えないものの類みたいですが)

(ほう、こいつはそういうの専門だが。どうする？)

クダンの言葉に少し顔が明るくなった。

しかし、しばらく考えてから。

(いいえ、結構です。主が気に入っているので)

主に遊んでもらった頃を思い出しているのか、暖かい笑顔をこぼす。  
優しく目を閉じて思い出に浸る。

(主が目覚めてこの目が元に戻っていたらきっと主が悲しみます)

ゆっくり目を開けると、目の色は赤く変わっていた。  
少し寂しそうな、しかし優しく強いその色にクダンも犬権も何も言えなかった。

(私はこれで失礼します。クダンさん、また騙されぬよう気をつけて)

小さく会釈すると猫は優雅に歩いていった。

クダンを連れて山の中に戻った犬樞は、ヤマキに用意させたものを確かめた。

「針、塩。おっけ」

手拭いに包まれた中身を取り出す。

刺すための針。

もののための塩。

沼風の話があってれば、これで大丈夫。

「クダン、意見は？」

(我輩に聞くな。食事して良いなら塩加減を気をつける)

ケラケラ笑うと緊張で固まっていたヤマキの顔が不安に染まった。

ヤマキからすれば俺の一人笑いに見えるだろう。

傍から見たらただの変人だ。

「オコジョと喋ってるの？」

「ああ、クダンってゆうんだ」

(よっ)

挨拶するように前足を上げるクダンにヤマキはビクンと肩を揺らした。

「今の挨拶？」

「よっ、ってさ」

「こんちわ」

戸惑いながら手を伸ばすとクダンの頭を撫でた。

(頭より顎が……)

頭の上に置かれた手を振り払い、ツーンと顔を背ける。

「頭は苦手？」

振り払われた手をもう一度近づけて顎をくすぐる。  
気持ちよさそうに顔がほころぶ。

「さて、緊張もほぐれたみたいだし。やろうか」

一通り撫でて顔に笑顔が戻ったヤマキに声をかける。

さっきほど強張った顔にはならなかった。

それを了解と受け取って、犬櫃は準備を始める。

胸ポケットに入っていた小さな紙や布、プラスチックたちをリュックから出した箱に入れる。

蓋はせずにいつでも取り出せるようにする。

ズボンのポケットに入っていた油性ペンも取りだし、耳にかける。

(赤にしろ、いざという時のために)

「赤か。わかった、赤にする」

クダンの助言を聞き、リュックから赤い油性ペンを出す。

長めの髪を止めるように耳にペンをかける。

ベルトのバックルを外し、いつでも解けるようにする。

「忘れ物は？」

(我輩に首輪をし忘れてるぞ)

「ふん、涎を垂らさない所を見ると興味ないんだろ？」

顎を軽く撫でる。

(最後にアレだ。梟)

「ああ、リュックの奥底に……」

リュックに腕を入れて底をかき回す。

目的のものを掴んで外に出す。

梟。

梟の焼き物。

嘴を大きく開け、腹に息を吸い込むような格好をしている。

「醤油さし？」

ヤマキが不思議そうに覗いてくる。  
梹の醤油さしにh並々と水が入っている。

「ヤマキ、離れろ」

ヤマキが一步下がる。  
それを見てから醤油さしを動かす。  
俺の周り一帯に円を描くように撒く。  
撒かれた水に誘われて、小さな紙たちが円を描く。

「不安か？」

「……………」

俺の問いかけに何も答えなかったが顔に書いてあった。  
緊張と不安は別物。  
さっきのように冗談では消せない。

「ヤマキ」

ちょいちょいとヤマキに手招きする。  
縁を描く紙たちを踏まないようにして円の中に入る。  
俺が円の中で胡坐をかくと、ヤマキも真似して座った。

「正座しろ」

ヤマキに坐り直させると俺は目を閉じて大きく息を吸った。  
吸ったままゆっくり目を開け、ヤマキに腕を伸ばした。  
抱きしめる。  
腕で優しく包み込むと少しずつ息を吐いた。  
抱きつかれた驚きにヤマキの体は固くなったが、ゆっくり呼吸を合わせると力が抜けていった。  
30回ほど呼吸を繰り返し、腕を解いた。  
ヤマキの顔は安心と決心に変わっていた。

「やるか」

「やるなら早くして」

俺がふんと意気込むと、ヤマキから小さな本音が漏れた。



まず火をつける。

右手でペンを持ち、腕を伸ばす。

箱の中から小さな紙が吸い寄せられる。

腕は止めたまま、紙が勝手に文字を描く。

【火】

書き終わったのを見て、ペンを耳に戻す。

「針」

左手で針を持ち上げ、右手に持ちかえる。

じゅっと紙が燃え始め、針が焼ける。

「目を閉じろ」

手でそっと目を覆ってやると、ヤマキは目を閉じた。

左手で左目下の出来物をつまむ。

中の黒点がするりと逃げる。

出来物を強くつまむとヤマキの顔がゆがむ。

（痛覚共通してるのか）

肩に乗ったクダンが呟く。

時間をかければかけるほど、ヤマキの苦痛が続く。

針を近づけてタイミングを探す。

殺されることを察知したのか、黒点が忙しく動く。

狙いが定められない。

（我輩が離れる。アレで早く終わらせる）

クダンは肩から降りると、紙で作った円の外へ出て行った。

黒点を見つめながら俺は意識を集中させていった。

口の中に唾液が溜まるのがわかる。

右の肩甲骨が熱い。

段々で息が荒くなり、口が開く。

涎が垂れていくのがわかったが、ぬぐってる暇はない。

溢れかえる欲望を弱い理性で止める。

口に溜まったものを三回飲み干した頃、心の九割は欲望に染まった。

息を大きく吸い込み、ヤマキを丸呑みできるほどに口を開ける。

「ていっ！！」

残った弱弱しい理性を溜まった欲望にぶつける。

意識が戻り、針がしっかり黒点に刺さったのを見る。

傷口からどろどろしたものが流れ出す。

すばやい動きでペンを出し、紙を吸い寄せる。

【封】

一枚書くと、円を描いていた紙たちに染み込む。

これで外へ出ることはできない。

逃がさない。

何が出てくるかわからず、ハラハラと登場を待った。

にゆるにゆると白い物体があふれ出している。

ぼとんと三つ塊が落ちると静かになった。

「……………あれ」

目の前に落ちたもの。

自分の想像とはまったく違うものだった。

「な、蛞蝓？」

99パーセント水分でできていると言われる生物。

湿気の多い時期に湿気の多い場所に出没する生物。

しかし、その動きは一般的な蛞蝓とは違っていた。

のろのろしていない。

「あ、塩」

啞然としてしまった。

慌てて塩に手を伸ばす。

蛞蝓に塩。

水分を飛ばすことで蛞蝓が小さくなり、危害を加えられなくする。  
さっとかけると予想通りに縮まり、5回ほどかけると見えない大きさになった。

「よし」

蛞蝓の対処を終え、ヤマキの前に戻る。  
針がまだ刺さっている。  
皮に刺しただけの針はすぐに抜ける。  
先端に幼虫をつけたまま。

「これは……」

円の外でクダンが舌なめずりするのが見えた。  
しかし、俺はそれを無視して箱に入れた。  
研究材料と書いた紙をはり、クダンが手を出せないようにする。  
しっかり閉まったことを確かめてからヤマキを見る。  
血も膿も出ていない。  
傷口も小さく、意識しなければ気づかれないだろう。

「目、開けていいよ」

ゆっくりと目が開いていく。  
少し眩しそうに瞬きをする。  
俺の顔を見てから、出来物があった場所を触る。

「ほれ」

【封】と書かれた紙を全て回収し終わった俺はリュックから手鏡を出した。

「うわぁ」

喜びの声をあげた。  
コンプレックスとなっていたものが消えた。  
それは頬を赤らめるほど嬉しいことだったらしい。

「ありがとう、犬権」

ヤマキは満面の笑みを浮かべた。

「お礼するよ。何がいい？」

「そうだなあ……」

ヤマキにできそうな礼を考えながら、俺たちは町へ下りていった。

ヤマキの卵を取り除いた日の夜。

俺は夢を見た。

過去も未来も現在も、全ての幸せを混ぜ込んだような夢。

それは吐き気がするほど幸せで、心の奥に現実という小さな恐怖を植えた。

「やっと起きれた」

目が覚めると布団の中にいた。

見慣れない天井を見て昨日のことを思い出す。

お礼にとヤマキの家に泊めてもらったんだっか。

「おはよ」

俺が起きたのに気づいたのか、隣で寝ていたヤマキも起きる。

眠い目をこすりながらぼーとする。

「いつもこんな夢なのか？」

すごく後味の悪い夢だった。

幸せな夢ではあったが、幸せだからこそかもしれない。

時が来て目覚めようとする、後ろ髪を引かれた。

引かれるどころではなかった。

ぴくりとも動けなくて、夢から目覚めるのに苦労した。

もがきもがいてやっとのことで脱出して出てきたら現実。

目覚めてすぐの絶望感は一瞬地獄じゃないだろうかと思わせた。

「犬権がどんな夢見たか知らないけど、寝起きはいつもそんなだよ」

素っ気無く言った。

俺は今日だけでこれだけ疲れを感じた。

ヤマキはこれを毎日感じているのだろう。

子供のほうが精神が破壊されやすいと聞く。

一度崩壊すると完全に元に戻ることはできず、歪んでしまうとも聞く。

「きつくないか？」

「辛いよ。辛いから三日に一度町外れで寝るんだ」

まな板に包丁がぶつかる。

とんとんと軽い音をさせながら切れていく。

無表情のまま料理するヤマキと並ぶ。

「手伝おうか？」

「いや、大丈夫。クダンのはどうすればいい？」

まだ眠るクダンを見る。

「あいつは自分で取れるから大丈夫だ」

ここまで静かな町で食べ物が見つかるなんて思っていない。

だからといって人間の食べ物を与えても「まずい」と言うだろう。

「欲しがったら俺の分ければいいよ」

意地でも欲しいなんて言わないのはわかっている。

でもヤマキはクダンをそこまで知らない。

だから「いつもそうなの？」と聞いて納得したように作業に戻った。

俺も何も言わずにヤマキの手元を眺めた。

朝食を取り、縁側でゆったりする。  
昨日、予想以上に力を使ってしまった。  
あまり力の入らない手を握って放す。

(蛭退治が原因だな、バカめ)

日陰でまったりするクダン。  
なぜ蛭退治のことを知ってるのか気になった。  
でも、それを直接本人に聞いたら負けな気もした。

(そんな体で蟻退治できんのか、ワカメ)

「ワカメ？」

(バカめの進化系、ワカメ！)

かっこいいだろうと胸をはるクダン。  
どこをどうコメントしてやればいいのかわからない。  
あれ、そもそもクダンは食べ物にワカメと呼ばれるものがあるのを知ってるのか。  
そこから怪しくなる。

「犬糞、急で悪いんだけど外出てくれる？」

「お、どうした？」

「母さんが起きた」

ヤマキはそれだけ言うと部屋の奥へ戻っていった。  
ヤマキの母親は真っ先に夢にのめりこんだようで、昨日話していたときもすごく躊躇っていた。  
3日に一度ほどの間隔で目覚め、ヒステリックに泣き叫ぶらしい。  
それを宥めて寝かしつけるのはヤマキの日課になり始めているとか。

「クダン、行くぞ」

脇に置いてあったリュックを背負い、ヤマキの家を出る。  
外は相変わらず無人で、薄っすら砂が舞っているために視界が黄色く感じる。  
どこか座れるところを探そう。

力の使いすぎは深刻で歩くのがやっとだった。

(おい、まっすぐ歩け)

「歩けるもんならまっすぐ歩いてる」

叩きつけるように言ってやった。

クダンから返事はない。

この町を見てると気が狂いそうになる。

一面砂と埃に包まれたこの町は人間がいなくなった未来の町なんじゃないかと思わせる。

一秒でも早く抜け出したい。

そんな気にさせた。

「あ」

(なんだ?)

「なんでもない」

あまりにもいい考えを思いついたのでつい声が出てしまった。

そんな俺を不審そうにクダンが見ているが気にしない。

気にしていたら見つかるものも見つけれないからだ。

ここまで砂が溜まっていればノームがいる可能性がある。

ノームに頼んで運び屋をつれてきてもらって、楽しんで町の外へ出る。

最高じゃないか。

(アホな考えしかできないお前には物運びで充分だ)

「なっ！失礼な」

人の考えを勝手に読んで、物運びで充分だと。

物運びの乗り心地の悪さは最悪だ。

そもそも彼らは物を運ぶものたちであって、人は運ばない。

無理言って運ばせてこの町に来たが、また乗りたいという気持ちにはさせてくれなかった。

(ほれ、ちゃんと歩けただろ?)

「……………」

(最悪の選択しかないと思えば歩けるもんだろ、人間ってのは)

そう言ってクダンは肩から降りた。

俺に向かってにたっと笑うと町の外へと走っていった。

「畜生、あの顔むかつく」

どこからか芽生えた競争心を燃やして犬樞は重い足を動かした。

(犬櫃、止まれ)

前を走っていたクダンが急停止した。  
小さなクダンを踏まないように俺も止まる。

(ほれ)

クダンが首で右を指す。  
医師団とその奥に神社の屋根が見える。  
顔を上げると赤い鳥居が目に入った。  
俺も後について上る。

(やっぱりな)

石段を上った先、本殿のあたり。  
食べ物や飲み物、花などの捧げ物が置いてある。

「獺を居つかせた元凶か」  
(それと同時に獺の寝床の可能性もあるな)

ぐると神社を見回したが、獺は見当たらない。  
声を聞くことも、気配を感じることもない。

「本当にいるのか？」  
(いる。上手く隠れているだけでさっきまでここにいた)

クダンの鼻がヒクヒクと動く。  
曖昧な匂いを辿って神社の中を歩き回る。

「クダン、探さなくていいよ」  
(なんでだ?)  
「この疲労じゃ見つけても何もできない。だろ？」

俺の言葉に納得したクダンは探すのをやめた。  
俺はもう一度神社をじっくり見る。  
本殿の前に供え物が山になっている。  
食べ物、飲み物、花、どれも埃をかぶっていない。  
誰かが毎日ここに供えているということか。

「これじゃ供えてる意味ないね」  
(だな。神はいないし、獺は人間の食べ物は食わん)

普通、神社には小さな土地神様がいる。  
土地神のほとんどは人間好きで、お参りに来れば見えないとわかっていても顔を出すものだ。  
それにこれだけ供え物があれば、信仰もそれなりあるだろう。  
信仰があれば神は逃げずにこの土地を守っているはずだ。  
獺に眠らされ続けることもない。

「ちなみに獺は近くにいます？」  
(いや、結構離れてる。こっちに気づいてるだろうから、ここから離れないかぎりここには戻らねえよ)

なるほどな。  
もう一度神社を見回す。

(休憩はここにするのか?)  
「いいと思う？」  
(知らんよ、そんなこと)

つんと冷たく言葉を放つが、却下しない。  
獺も普通に暮らしていれば害のないやつなのだから、警戒する必要はないという考えだろうか。  
砂のつもった石段に腰をかける。  
ゴツゴツとした感触が尻に伝わる。

「ああ……」  
(どうした?)  
「空が曇ってる」

見上げると一面灰色の空だった。  
濃淡もわからないほどの厚い雲。

太陽が毛布をかぶって眠っているかのようだ。

(雲は猥の影響じゃねえぞ)

「わかってる。ここは地形的に雲の多い町だからだろ？」

自信満々に答えてやるとつまらなそうに舌打ちをした。

天候まで猥の影響を受けていたら、前に来た陰陽師とやらは慌てて何かして行っただろう。

しかし、この町に俺を邪魔するような力はなく、クダンも嫌がらない。

その陰陽師は本当に何もせずに去っただろう。

「陰陽師か」

(気持ち悪い言葉を吐くな)

「ごめん」

クダンの陰陽師嫌いはさすがなものだ。

口に出しただけで怒鳴られた。

ここまで嫌う理由は昔閉じ込められたとかだったか。

たしか、人に危害を加えていないのに急に掴まれてそのまま札で閉じ込められたとか言ってた。

陰陽師から見れば、こんなに強大な力を持ったクダンは恐怖の対象だろう。

それは近くに住んでいた人間も思っていたことだろう。

だから陰陽師はクダンを無理やり閉じ込めた。

人助けのつもりで。

陰陽師とは人助けの集団だ。

人間のためなら何をしてなかまわない。

そんな考えの人たちだ。

そんな陰陽師がなぜこの町の猥をつかまえなかったのだろうか。

爆破人に見えない。

だから陰陽師にも見えなかつただろう。

見えず聞こえずの状態で猥を捕まえるのは不可能だ。

だから諦めた？

いや、それはない。

ほかにも方法があるからだ。

玄関に札を貼れば弱い力なら防ぐことができる。

猥は大層な力を持ってるわけじゃない。

神のように信仰によって力を強くするわけでもない。

つまり猥は強くはない。

そんな猥を陰陽師は放置した。

札を配ることも、獺の力を弱めることもしなかった。

(空を睨んでも何も降らんぞ)

「わかってるよ、そんなこと」

クダンに言われて気づいた俺は眉間に溜まった皺を緩ませた。

なぜだろうと悩んだ風を見せたが、答えはわかってる。

陰陽師は人のために獺を放置したのだ。

この町の人々の幸せのために。

「人間の幸せ……なあ」

(どうした?)

「なあ、クダン。この町から獺を祓っていいのかな」

思ったことをそのまま口に出すと、クダンは俺にわかるようにため息をついた。

(お前はバカなのか?)

「俺はバカだよ。でもさ、さっきのヤマキ見ただろ？」

母親が目覚めたからと俺たちを追い出したヤマキ。

目的地なくフラフラ歩いていたときに、ヤマキの家から悲鳴が聞こえていた。

女性のとても悲しい叫び声だった。

「もし今獺を町から離したらどうなる？ヤマキは毎日あの声に耐えなきゃならない」

(そうだろうな)

「ヤマキのためを考えたら……」

(だからバカなんだよ、お前は)

一拍置いて俺を黙らせる。

(あのな、今お前が獺を祓わなきゃ坊主は母親が死ぬまで3日に一度あれに耐えなきゃならん)

「……………」

(それに比べて獺を祓えば坊主に希望ができる。我輩は人間歴がないから知らんが、人間は希望を持ちそれに向かって走れるのが幸せなんだろう?)

前足で顔を洗う。

そのしぐさと台詞のギャップに力が抜ける。

なんてバカなことを考えてたんだと思い知らされる。

「ああ、俺はバカだな」

(バカでアホでクソ野郎だな)

「ずいぶん増えたな」

(増やしてんのはお前自身だろ)

かけあいがいつもの調子に戻る。

「さて、そろそろ動くか」

(何か目標でも見つけたか?)

「ああ、猥を祓うためにもう少し情報集め。クダンも手伝えよ」

(ちっ、めんどくせえ)

クダンは嫌そうな顔をする。

でも俺は知ってる。

こうやって嫌な顔して「めんどくせえ」という時はちゃんと手伝ってくれる。

クダンはいつもそうなんだ。

「すっかり夜になったね」

濃紺に染まった空を見る。

昼の雲は嘘のように消えていた。

（行き帰りに4時間、情報持ち探すのに3時間。情報持ちの話に2時間。合計9時間だぞ。我輩を殺す気か）

「そんならいで死んでくれたら楽なのに」

（黙らんか、このすかぽんたん）

疲れが溜まりすぎて大事なところが爆発したクダンが喚く。

真面目に言い合うと俺も疲れるので相槌だけ打つ。

クダンがここまで疲れているのは、俺の力回復のためにずいぶんと動き回ったからだ。

いつも動かずに肩でぐーたらしてるのだから、たまには運動をね。

「クダン、それくらいにして本題に入るよ」

クダンの友人たちの愚痴が始まる前にクダンを止める。

あれが始まったら3時間は口を閉じないだろう。

「古木のグリーンメンの話だと、目隠しを嫌うんだってね」

（らしいな。瞼は大丈夫なのに目隠しごときを嫌がるなんてな）

特別な布に【目】と書いてそれをつけていれば獺の夢にかからない。

嬉しいことにその目隠しをしていれば獺の姿を見ることができる。

「目隠しを一つ作るのが最初にやることだな」

（いや、二つだ）

「え？」

クダンが視線を左に向ける。

よくわからずに俺も左を見た。

「ヤマキ」

ヤマキが立っていた。  
どうしていいのかわからないような顔をしている。

(二つ必要だろ)

クダンの方を見てうなづく。  
それからもう一度ヤマキを見る。

「ヤマキ、この町を苦しめてるやつを見たいか？」  
「いいの？」  
「ああ、せっかくだ。なかなか見れない代物だしな」

笑って言うとヤマキは強くしっかりうなずいた。  
それを見てからクダンを見る。

「目隠し作るにしても布はどうする？ばあさんに頼むか」  
(この時間にあのばあさんが喜ぶと思うか？)  
「思わないねえな。絶対ぶち切れる」

怒鳴りつけてくるばあさんを想像して嫌になる。  
だからと言ってこの町に目隠しにできそうな布があるとは思えない。

(お前の小さな布をくっつければできる)  
「俺のってただの無駄使いじゃんか」  
(ばあさんに怒鳴られるか、明日に延ばすか)

明日まで延ばすことはできない。  
この町に長居しすぎてる。  
そしてばあさんに怒鳴りつけられるのも嫌。  
となれば小さな布たちを使うしか選択肢はない。

「何でくっつける？」  
(米だな)  
「米？なんでそんな面倒なもので？」

げーっと嫌な顔をする。

わざわざ米を使わなきゃいけない意味がわからない。

(獺はなぜ人間の食べ物を食べない？食べれないわけじゃねえぞ)

「そんなにまずいか？」

(まずいな。我輩たちの口には合わん)

「わかった。米でくつつける」

米以外の道はないようだ。

「ヤマキ、米炊いてくれるか？」

「今から？」

「今から」

「一時間くらいかかるけどいい？」

針がやたと覆い懐中時計を見る。

今は八時。

一時間後は九時。

「ヤマキは普段どれくらいに寝る？」

「十時くらいかな」

「頑張ったら？」

「頑張れば十二時くらいかな」

ギリギリか。

まあ、明日の朝日を拝まないくらいには終わるだろう。

「腹ごしらえと糊分、炊いてもらえるか？」

「わかった、二合あれば足りるよね」

「ああ」

二合がどれくらいかわからなかったが、頷いた。

そんなこと知らないヤマキは走って家へ帰っていった。

その背中をクダンと一緒に見送った。

「実際のところ目隠ししか対処法聞いてないけど大丈夫かな」

(何を今更。獺には実体はあってないようなもんだ。こないだみたく塩は効かんよ)

「わかってるけどさ。説得できなかつたらどうする？」

(離してダメなら脅しだろ)

「クダンの脅しなら効くな。上位だし」

(いや、お前の脅し。我輩はもう疲れた)

落胆したような演技をする。

わかってる。

見え透いてる。

これは演技だ。

(言っていなかったが、実を言うと我輩よりお前の中のほうが上位だ)

「え……」

(だから猿への脅しはお前のほうが効く)

聞かされていなかった真実に顔がにやけてくる。

クダンより上位な俺。

今まではクダンに従っていたが、俺に従わせると言うことか。

歓喜のあまりこぶしに力が入る。

(ま、そういうことだからお前に脅しも頼んだ)

「やっぱり嘘か」

(いや、お前の中のほうが上位だ。だが、お前は我輩より下。ただの人間だ)

クダンを手懐けるのはまだまだ先の話ということか。

ま、どう足掻いたって何かしら理由をけられて俺がやるのだろう。

結末は見えてる。

反論せずに受け入れようじゃないか。

「よし、作戦会議も終わったことだし腹ごしらえするか」

(おう、食いに行くか)

「お前は食わないだろ？」

(いや、食う。少し食う)

珍しいこともあるもんだな。

あんだけまずいまずい言うくせに。

(そろそろ鬼火が出る時間だからな)

「鬼火かよ……」

(我輩が人間の食いもんなど食うわけないだろ)

勝ち誇ったような顔をした九段は先に歩き始めた。

「わかってましたよーだ。別にお前が食うなんて思ってねえし」

あからさまな強がりをクダンに投げてからクダンの後を追った。

わざとらしく風が吹く。

目隠しをつけた俺とヤマキ、飯の時間を持つかのように舌なめずりするクダン。  
神社は昼間と変わらぬ静けさだった。

「クダン」

(ああ、いる。間違いなく構えてる)

クダンは期待の眼差しで神社を見た。

余裕綽々なのがわかる。

上位ってのはみんなこうなのだろうか。

緊張を紛らわすように少し考える。

(布はもうねえんだよな)

「あるのはプラと紙だけだ」

紙・プラスチック・布の三つの中で一番多様性があるのは紙だ。

だから麻画しに紙を使わずに済んだのはすごくありがたいことだった。

しかし、何が効くかわからない相手に二種類しか持ち合わせていないのは心細い。

心細いからと怖がっている暇もなく、クダンは俺に命令する。

(早くしろ。怯えてる暇があったら歩け、このノロマ！！)

馬の尻でも叩いているつもりなのか、背中にバシバシと尻尾があたる。

先ほどから一言も喋らないヤマキを見る。

小さな布で作った目隠しの力で、ヤマキの顔が昼間以上にはっきりと見える。

目隠し越しにちゃんと見えているようで、警戒に目を動かしている。

「大丈夫か？」

俺が声をかけるとびくりともせず ゆっくりとうなずいた。

どうやら俺よりヤマキのほうが準備できているようだ。

正面を見る。

緊張で足がすくんだ。

ガチッと歯と歯がぶつかった。

拒否していた入り口が一瞬揺らぎ、誘い込むような生暖かい空気が流れ出す。

向こうも準備ができたということだろう。

空を見上げる。

光らない星が月だけを置いてきぼりにする。

深く息を吸う。

生暖かくて埃っぽい空気。

ゆっくりと足に力を入れる。

一步踏み出したら止まれない。

止まることを忘れよう。

そして次にここから神社を眺めた時、満点の星が出ていてほしい。

ぎこちない一步、滑らかな二歩。

あとはいつものように足が勝手に動く。

隣にいたヤマキが歩幅を合わせて歩く。

神社の入り口、階段の最後の段でまた空気が変わる。

暖かかった空気がひんやりとする。

寒くはない。

人肌より少し低いさらりとした空気。

獏の張った結界に入ったのだろう。

どこか遠くでキーンと耳鳴りのような音がする。

木々が騒いでいるのか、さわさわと声に似た音がする。

神社の中を見回す。

昼間と変わらない。

暗くなったことでどよんと重い雰囲気を出しているが、さらりとした空気がそれを拭い去る。

耳鳴りが大きくなる。

「はぁ」

緊張を和らげるために多く息を吐く。

吐いた音を少し邪魔する耳鳴り。

耳抜きを試みる。

耳鳴りは消えない。

気圧が変わったわけではないようだ。

原因のわからない耳鳴りに小さく舌打ちをする。

「ヤマキは大丈夫か？」

「何が？」

「耳鳴り、しないか？」

ヤマキが耳を澄ませるが首をかしげた。

さっきまで肩に乗っていたクダンが見当たらない。

こういうときにいなくなるのは珍しいことだが、気になれば後先考えずに走るやつだ。

考えるだけ無駄。

「犬榧」

「どうした？」

ヤマキが立ち止まる。

遠くを右手で指差し、何かを伝えようとする。

「ほら、あれ」

「なんだ？何も見えない」

ヤマキの視線の先を見るが何も見えない。

それでもただただ指を差し何かを伝えたがる。

「あそこに見えるだろ？蛍みたいな光が」

「見えない。何も光ってない」

目を凝らしてみるがやはり何も見えない。

目を擦ってもう一度見ても見えない。

どう足掻いても犬榧には見えそうになかった。

そんな様子を見ていたヤマキは犬榧を睨む。

「もういい。やっぱり犬榧も嘘つきなんだな。町みんなが言ってた。聞こえ人ってみんな嘘つきで悪い人なんだろ！？」

鳴きそうな顔で犬榧を怒鳴りつけると指差していた方向へ走り出した。

引き止めようと腕を伸ばすが時すでに遅し。

ヤマキは腕をするりとかわして逃げていった。

犬榧はぽつんとそこへ取り残された。

ヤマキの指差した方をもう一度見てみるがやっぱり何も見えない。

ぐるりと周りを見合すが光のようなものは何もない。

光りそうなものもないし。

「神社もない……」

さっきまであったはずの神社が見当たらない。  
見逃すはずもない。  
見間違えるわけもない。  
でも、そこには神社もなければ何もなかった。  
ただの平面の上。  
暗闇の中。  
この場所は犬権に必要以上の孤独感を味あわせる。

「ここはどこだ？」

さっきまでいた神社ではない。  
足から伝わる感触は乾いた砂。  
神社にいた時と変わらない。  
遠くまで見えるのに本当に何も無い。  
こんな場所、あの町にはない。  
つまり、遠いどこかへ飛ばされたか、異世界へ飛ばされたか、もしくは。

「夢の中か」

摸らしい戦術だと言えればいいだろうか。  
感心はしてみたものの、いつ夢に入ったかわからない俺にここは異界となんら変わらなかった。

「おーい、摸さん。見てるなら返事をくださいな」

どンドン形を変えていく空間に呼びかける。  
しんと何の音もしなかった。  
気になっていた耳鳴りも、ざわざわとした木の声もなくなる。  
少し周りを見渡してからゆっくり目を閉じる。  
目を閉じると耳が研ぎ澄まされ、さきほどよりよく聞こえる。  
まだ小さい音だがそれは確かに聞こえた。  
木々の擦れるさわやかな音と、太った子供の声。  
言葉は聞き取れないがちゃんと聞こえた。  
目を開ける。

「よお、やっと会えたな」

(やぁ、さすが祓い人様。夢だと見破られてしまいました)

目の前に立った太った小人。

子供用のスーツに太った体を無理につめこんだような容姿。

その格好でお辞儀をすると、すぐにでもベルトが千切れそうだ。

(おやおや、まあまあ。あなた様の想像なさっているワタクシはなんとも可愛らしいのですね)

獏が己の体をじっくり眺める。

(動きにくいですが、声のイメージにはぴったりでございます)

満足したように大きく頷くと俺の方を見る。

それからニコッと満面の笑みを浮かべて獏はまた喋りだした。

(祓い人様が何をしに来たのかくらいわかっております。ワタクシを祓うのでしょうか?)

「いや、まだ決まったわけじゃない。お前の意見も聞こうじゃないか」

獏のうるうると泣きそうな目に情けをかけたわけじゃない。

無理に閉じ込めるのはただの悪循環なのだ。

(なんとお優しい！ちなみにお名前を聞いてもよろしいですか?)

「犬榎だ」

(おお、犬榎とは植物の名前ですね。ええええ、知ってますとも。こんなですよ?)

夢の中なので想像した形をぽんぽんと作る。

次々と植物と思わしきものを作っていくがどれも違っていた。

そもそも現実でありえる植物が一つも作られなかった。

「俺はそんなに非現実的か!？」

(いえ、まさか！犬榎はこんな感じでしたよね?)

「唇オバケの名など自分につけるわけがないだろ!!」

最後に出てきた化け物のようなものを見て犬榎はぐったりした。

「はぁ」と獏にもわかるように大きくため息をつく。

「もう俺の話はいいよ。お前の話を聞かせて」

(ワタクシですか？えっと、何を話せばよいのですか？)

うまく機嫌の取れなかった獺が慌てふためいた。

「なんでこの町に住み着いたとか、お前の正体とかな」

(ああ、なるほど。正体は獺です)

獺の口が止まる。

獺が獺なのくらいはわかっていることだ。

犬樞が先を促そうと口を開くと、喋り出す前に獺が話し始めた。

(実を言いますとワタクシたち獺のほとんどは実体がありません。見てわかるとおり夢でのみ生活しております)

「実体がないのにどうやって伝えられてきたってんだ？」

(そう、そこなんです。今の獺は実体がありませんが、過去にはいたかもしれないと伝説のように伝わっているんです)

よくぞわかってくれたと3回拍手をした。

(伝説では、良い事をする実体が持てると言われていたのです)

そこまで明るく離すと急に肩を落とし、顔を下に向けた。

(最初は良い事をしているつもりでした。神のいなくなったこの町に幸はとても少なかった。だから手助けになるならと、夢へ入ったのです)

「それで夢を喰ったらうまかったと」

(いえ、獺は夢を食ったりはしません。ワタクシたちにとって夢は世界です。なくなってしまうたら困るのですよ)

実体もなければ前例も少ない。

情報に間違いがあるのはわかりきっていたことだ。

「じゃあ、何を食べてんだ？」

(ワタクシたちは、人間などの幸せや絶望を食べています。『なんか幸せな夢だった気がする』や『最悪な夢だ、クソッ』という気持ちを少し頂いて生きているんです)

つまり、食べるために夢に入るわけか。

「夢をコントロールするってことか？」

（ええ、夢は一度見ると覚えているものです。特に怖い夢はね。だから、ちょっとでも似ている場所を作ってしまうとまた同じ怖い夢を作ってしまうんです。そこでワタクシたちが、夢に出てくる小物をずらしたりして、怖くないようにしているんです）

自慢をするようにグッと胸を張った。

しばらくその体制を保ったが、段々で力が抜けていき、気づけば元のように頭を垂れていた。

（まさかこの力が人間を不幸にするとは思っていなかったのです。怖い夢を怖くない夢にするのはいいことだし、ちょっと幸せな夢をもっと幸せな夢にするのも良いことのはずだったのに。ワタクシはあんなに明るかった町を暗くしてしまったのです。）

獺が後悔を語る。

先ほどまでの笑顔は消え、腕を腹の前で組み、体を小さく見せている。

「後悔してるから見逃せて言いたいのか？」

犬樞が厳しく言うと獺はぶんぶん首を振った。

（そんなことは言いません。ただ償い方がわからないのです）

「償い方？」

（ええ、償い方です。このままここにはいけないってことはわかっていますが、このまま出て行ってもあの子供が死んでしまうでしょう。）

あの子供。

ヤマキのことだろう。

もし、今この瞬間に獺がいなくなったら、ヤマキは母親の叫びを聞き耐えなくてはいけなくなる

。

（あの子供を見捨てることはワタクシにはできません。あの子供だってワタクシのせいで苦しんでいるのです）

「ちゃんとわかってるじゃないか」

（わかっていなければすぐにでも退散しております）

わかっているからこそ出て行けない。

納得のいく理由。

(ですからぜひとも犬樞様の知恵を貸してほしいのです)

「まず、お前は どうしたい？」

(ど)

「どうにかしたいはなしだ」

何も無い地面に胡坐をかく。

獺も真似して座ろうとするが、足が短くて胡坐がかけない。

仕方なく獺は正座をした。

(誰一人苦しまずと言うのは無理でしょうから、誰一人死なずに元の町に戻りたいです)

「元の町にねえ」

元の町の状態を知らない俺には想像できそうになかった。

まあ、でも、しかし。

何をやりたいかわかった。

反省していることもわかった。

この二つがわかれば後はアイディアを出し合い、いいと思うことをやればいい。

それだけのことだ。

「参考までに聞くが、移動手段は？」

(さあ？ワタクシ自身もよくわかっておりません。夢を渡り歩くとか言われていますね)

夢を渡り歩く。

眠った人の夢に入り、目が覚めないうちに別の人の夢に移るということか。

「ん？食事はどのタイミングだ？」

(人は目覚めてからすぐはぼーっとしていますよね。あのタイミングです)

「目覚めてすぐの一瞬ってことか」

(犬樞様は目覚めがいい方なのですね。ぼーっとする時間は人によって一瞬もあれば一時間近くある方もいるのですよ)

関心したように獺が頷く。

「じゃあ、移動距離はそう長くないって感じか」

(長距離移動はあまりしませんね、はい)

「やろうと思えば？」

(できなくもありません)

正座した足に乗せた手にぎゅっと力が入る。

(長距離移動をしてしまうとなかなか帰ってこられません。逆もです)

「長距離はできないのか」

(そうですね。その案はやめたほうがいいかと思われます)

ふりだしに戻る。

腕を組んで考えるが思いつかない。

獺も首をかしげて考えているようだ。

「俺は一つ出したから次はお前な」

(ふむ、どうしたらいいでしょうかね)

獺は目をつぶって眉間に皺をよせる。

(人の夢に入らないって選択はねえのかよ、ワカめ！)

後ろから耳を齧られる。

激痛と共に血が垂れる。

(あまりにも長い間食べないと餓死します)

(んなことたあ、わかってる。一日二日我慢したって死にゃあしないだろ)

クダンは口からペッと血を吐いてから前足で口を拭う。

「クダン、お前はどこから現れた？ここは一応俺の夢の中のはずだろ？」

(あ？んなこともわかんねえのか、くそワカめ)

(実はワタクシの夢に皆さんをご招待したのです)

教えてやるのが早い と獺のわき腹を小突く。

獺は素直に謝った。

「ちょっと待て。じゃあ、ヤマキもここにいるのか？」

(ええ、いらっしゃいますよ。ワタクシの夢の中で迷子になっていると思われま)

(そりゃ、迷子になるさ。てめえ、時間が経つ毎に広くしてるだろ。やっと落ちれるって思ったら広くしやがって)

落ちる。

上から落ちる夢を見るとほとんどの人が目覚める。

意識ある夢でも夢の皿から落ちれば目覚めると言うことか。

(あのガキも無意識のうちに端っこの方をうろうろしてんだろ)

(無意識というのが怖いですね。端っこだと気づかずに端に向かって歩きますから)

(そのおかげでこっちはぐるぐる同じところ歩かされてたんだぞ。どうにかしろ)

クダンの無茶振りに獏は孫の手を出す。

ほかにも手動マッサージグッズを一山取り出した。

(これでいいでしょうか?)

(全自動のマッサージチェアはねえのかよ)

(申し訳ありません。それがなんなのかさっぱりわかりません)

クダンは仕方ない雰囲気をかもし出しつつ、孫の手で背中を搔いた。

「元の話に戻そう」

(ずらしたのはお前だ)

「わかってる。だから俺が戻す」

クダンを見ると気持ちいいところを擦っているようで後ろ足がピクピク動いている。

人間がこれをやったら気持ち悪い光景だろうな。

クダンがオコジョでよかった。

「クダン、お前が意見出したんだから説明しろよ」

(我輩が出したのはヒントであって意見ではない。つまり、説明する必要はない)

説明が面倒なだけでなくせに。

(もう一つヒントを言うなら、この件は短期間で解決できるもんじゃねえ。だから、てめえの手

助けなしに一人でできなくちゃいけねえかな)

「ヒントというより縛りだな」

クダンの言うことは間違いではない。

俺がいつまでも面倒を見てやるわけにはいかない。

「食事の我慢は最初のうちしかできないだろ。ダイエットといっても食事を抜くだけだと体を悪くするだけだ」

(まあな、でもこいつは太ってるんだから少しは無理させた方が.....)

(待ってください。ワタクシは決して太ってはおりませんです。これは犬樞様のイメージにございます)

猿を揶揄ってけらけら笑う。

(顔を赤くして怒るとますます可笑しくなるな)

(誰が怒らせてるんですか!?)

この町の人間は言ってしまうえば猿中毒だ。

だから手っ取り早いのは猿を遠ざけることだ。

しかし、単純に離せばいいわけではない。

急に離せば絶望に自殺をはかる可能性がある。

それは避けたい。

猿の願いでもあるし、俺の願いでもある。

「猿、根本的なことを聞いていいか？」

(はい、なんでしょう?)

「お前は町全体にいる人々の夢に入ってるらしいが、夢に入り込んでしまう範囲ってどれくらいなんだ？」

俺を中心にぐるぐる追いかけてこしていた猿が足を止める。

(さあ?)

「さあってお前な.....」

(いえ、自分のことなのですけど、これについてはさっぱりわかりません。人は短い夢を何度も見えています。夢が終わるとその人から移動し、別の方の夢へ入ります。一晩で大体三人でしょうか)

獾は顎に手を当て、ない髭を擦る。

「それは嘘だろう。だってヤマキがこの町から出ないと夢を見るって。それに俺だって、クダンだって……なあ？」

（ああ、見た）

一晩で同じ家で寝ていた三人の夢に入った？

だったらヤマキの母が起きていたはずだ。

町の住人だって一日中獾の作用がなければ寝続けることはなかったはずだ。

（ワタクシは犬樞様の夢に入った事はありません。ましてや、あの子供の夢など、入るわけがありません。）

ヤマキは獾にとって唯一自分の力に負けなかった人間であり、唯一の希望でもある。

そんな人間の夢に入り続けるのは変な話だ。

（この町には約三十人の人々が住んでいます。毎日違う人の夢に入っているつもりなのですが……）

「ですが、何だ？」

（三年前に誰かが神社の本殿の中で何かなさったんです。そしたら町の人々の眠る時間が長くなり始めました。）

「三年前……」

（それから半年に一度くらいの感覚で訪れては本殿で何かされています。）

「最後に来たのは？」

（半年ほど前ですね）

半年前に来て、神社をいじったやつ。

ヤマキは半年前に陰陽師が来たと言った。

そろそろまた来るということだろうか。

（町の異変と同時にワタクシも動けなくなりまして）

「動けない？」

（ええ、神社から外へ出れず出来るだけ毎日違う人へ入っている状況なのです）

それはまた新しい情報だ。

ここに来た時、獾はここを気に入り自分の意思で住みついたと考えた。

しかし、ここまで聞けばそうではないらしい。

「クダン、俺は陰陽師に詳しくない。こんなことできるのか？」

（できるな。本人に気付かせずに封じたんだろう。しかし、その場合その陰陽師はこの村の人間を見捨てたことになるな）

陰陽師は人間のために行動する。

者のことも考える祓い人とのわかりやすい違い。

「人間のためを思って獺の力を解放したまま縛ったってことか」

（だろうな。単純に獺を封じるのでは人間のためにならない。人間の幸せには繋がらなかったってことだろうな）

それは俺もそう思った。

単純に獺を祓ってしまえば、唯一正気のヤマキの心が危ない。

陰陽師もそう考えたのか？

いや、それはない。

今まで耳にした陰陽師は大衆を救っていた。

そのための少数の犠牲は当たり前のようにいた。

ここに来て、それが覆る事はないだろう。

幸か不幸か陰陽師と名乗っているのは両手で数えられる程度しかいないのだから。

残る選択肢は。

「起こすより眠った方が幸せ……か」

（だな。起こさないで現実を見せない方が人間のためなんだろうさ）

考え方は人それぞれ。

感じ方も十人十色。

それを幸せと思う人もいれば、不幸に思う人もいる。

その考えを否定しない。

別に悪いわけではないから。

しかし、今回は否定する。

町の時間を止めるのは悪だ。

俺の考える絶対悪に触れている。

（よいしょ）

寝転んでいたクダンが立ちあがる。

(ここまで情報が出揃えば我輩がいなくてもできるだろう。我輩は夢を広げまくってるガキでも探しに行くかな)

「そうか。迷子になるなよ」

(あ、こちらをどうぞ。彼の居場所がわかりますよ)

どこからともなく木箱を出す。

中心に黒い板が張られており、黄色の矢印が点滅している。

(れいだというもので、探し求めているものを見つけて下さる箱だそうですよ)

レーダーというより方位磁石に近い気もするが、突っ込んでたらきりがない。

(おう、サンキュ)

クダンは片手にレーダーを持って二足歩行で霧の向こうへ消えて行った。

「話をまとめよう」

(はい)

町の住人が眠ったのは神社を弄られてからだな」

(はい。半年ほど経つと目覚め始める方もいるんですが……)

「また来て何かされて一からやり直しか」

獭は頷いた。

陰陽師は半年程度で効果が切れる弱い封をしているってことか。

「ちなみにさっきちゃんと聞かなかったが、三年前よりもっと前。弄られる前ってのは普通に暮らしてたのか？」

(はい。毎日良い夢を見れる訳じゃないので)

つまり、陰陽師が来なければこの町は普通で、なんの問題もなかった。

さっき考えた仮定が崩れる。

大衆を救うどころか大衆を犠牲にしている。

もっと大人数を救ったのか？

いや、こんな小さな獭がそんな人数の敵だなんて考えられない。

「実験か……」

(え？)

「いや、なんでもない。神社の本殿全体を使われてるのか？」

(ええ、入口に魔除け人除けがしてあるはずです)

「なるほどね。だから眠っちまったのか」

獭は一度も俺達を眠らせたと言わなかった。

人除けに当てられたから眠っただけで、獭は何もしてなかったってことだ。

「人除け剥がして、中のも剥がせば一件落着か」

(そうですね。あとは町の人でどうにかしなければなりません)

「ヤマキがきつくならないように最初のうちは一日十人くらい面倒見てくれよ」

(ど、努力します)

やらなければならないことを理解した。

きっと今夜中には終わるだろう。

「今、現実だと何時くらいだ？」

(えーと、たぶんですが三十分ほど経ってますね)

「三十分ってことは、十一時近いのか」

ヤマキの就寝時間はとっくに過ぎている。

「なあ、獺。ヤマキを起こさずに俺が起きる方法ってあるか？」

(はい、ワタクシがヤマキ様の夢を切り離して、犬榎様が落ちればヤマキ様の方が遅く目覚めると思います)

「ヤマキの夢を切り離した後、支障が出ない程度にヤマキを夢に縛ってくれるか？」

俺の言葉に獺は首を傾げた。

「俺が本殿もろもろを片付けたのがわかったら解放してあげて欲しい」

(見られたくないんですか?)

「ん、まあ、見られても別にいいんだけどさ。用が済んだらすぐ出て行くつもりだから」

(引き留められたくないのですね。わかりました。やりましょう)

「ありがとな」

獺に笑いかける。

獺も可愛らしい笑顔を返してくれた。

(犬榎様。1つ雑談とお礼を込めて、謎に包まれた獺の話しをしましょう)

「ん？」

(獺には実態がないと話しましたね。あったものがりのかもと話しました。実はそれともう一つ語り継がれているものがあります)

「へえ」

(獺の先祖は葉と風だという話です)

獺が空から葉を出す。

(涼しい風は人々に快適な眠りを与えます。葉は風に揺られる事で人々に安らぎを与えます。それらが混ざった事で獺は人々の夢に入り、快適な眠りと安らぎを与える事ができるらしいです)

「へえ、面白いな。自然と自然では自然しか生まれないうのが嘘になるな」

(ワタクシの話しが嘘かもしれませんが)

「可能性の話しだろ。だったら俺は面白い方を信じる」

空中を飛んでいた葉が風に吹かれて遠くへ飛ばされる。  
獺の視線を戻すと、がくと体が重くなる。

(犬糞様の役に立つかわかりませんがお持ち下さい)

新しく出した葉を俺のズボンに入れる。  
また体を感じる重さが増す。

(それでは。またいつか会う日まで)

獺が笑顔で手を振る。  
振り返そうと手を上げたが重くて上げることができなかった。  
ふっと床がなくなり、体に重力のようなものを感じる。  
速い乗り物に乗った時のような重い重い重い感覚だった。

目覚めると神社の入り口だった。  
鳥居のすぐ下で俺とヤマキが並んで寝そべっている。  
上半身を起こし、意味のなかった目隠しを外した。  
周りを見回すと少し離れたところにクダンがいた。

(起きたか?)

「ああ、よく寝れた。クダンは？」

(あのクソ猿め。急に落とすなんて無礼にもほどがある)

文句しか言わないクダン。  
まあ、だろうと予想はしてたけど。

「クダン、悪いけど人型になってくれるか？」

(なんで?)

「ヤマキを自宅に帰してやって欲しい。ここで眠り続けるのは可哀想だろう？」

数秒俺を睨みつけてからクダンは人の形に変わった。  
人の形といっても俺と瓜二つの男姿だ。

「俺は本殿に行くからその間によろしくな」

(我輩に命令など、百年早い)

「命令じゃなくて、頼みだよ」

(ふむ。頭が高いと言いたいが、今回だけだぞ)

俺そっくりのクダンはヤマキを背負って神社から出て行った。

本殿と言うのは参拝用のお賽銭箱が設置されている拝殿の奥にあるもう一つの建物の事である。最近土地の問題で本殿を設置しない神社も増えているらしい。

しかし、この神社はそこそこ古くて歴史もあるらしく、しっかり本殿がある。

無人になってから相当経つようで雑草だらけで荒れているが、百年以上前なら立派な本殿だったのがわかる。

本殿入口の扉を見ると、ベタベタとお札が貼ってある。

神社としてはどうかと思うが、肝試しするには最適かもしれない。

「んー。どれが本物だ？」

普通というか、陰陽師の常識として、力に合った札を貼ることが多いらしい。

だから、強く自信のある陰陽師は札を一枚しか貼らない。

今回のような更新していかなければならない時も札の上に札を貼る。

こうもわかりやすくベタベタ貼るのはど素人か、フェイクと思われる。

つまり、フェイクの中から本物を探さねばならない。

「ま、爆弾じゃないから間違えても大きな支障はないだろうけど」

でも、時間をかけるのは得策ではない。

さっきまで寝ていたおかげで起きていられるが、いつ寝てしまってもおかしくない。

「仕方ない。手伝ってもらうか」

昨日は一点に集中したが今日は全体に意識を向ける。

さすがに連日だと肩甲骨が熱くなるのが早い。

昨日より楽なのは理性で止める必要がない事か。

ヤマキの前でこいつを見せたくはない。

「オレさまはあれか？友達呼んだ時に押し入れに入れられるやつらと同等か？」

違うよ。

どちらかというから見られたくない一面だ。

「はん。、オレさまはてめえの一部じゃねえ。てめえがオレさまの一部だ」

知ってる。

あんたの体力回復のために俺の中で眠ってるだけだろう。

毎回言わなくてもわかってるよ。

「わかってるならいい。んで、なんで起こした？」

扉の札を剥がして、中も札あるから剥がしてほしい。

「それくらい自分でやれよ、オレさまは眠い」

その眠さの三割は札が原因なんだ。

フェイクに騙されてややこしくしたくないし、あんたしか頼れないんだ。

「牛野郎はどうした？」

クダンは別件で動いてる。

「そうか。仕方ねえな。これやったら三ヶ月は寝かせろよ」

努力する。

「はん。三枚か。順番は下、左、上」

おい、慎重にな。

「別にこれくらい間違えたって蛆虫が湧くだけだ」

蛆虫……。

「あ、てめえは蛆虫ダメだったな。いっそのこと間違えとくか？」

やめろ！

「ふは！この体は今オレさまのもんだ。何をしようが……」

や、やめるんだ！！

「……飽きた。次、左、右、左。角四つの真ん中。さ、入るぞ」

ずい分複雑だな。  
用心深いのか。

「んや、更新するたびに忘れて準備適当にただけだろ」

バカだったか。

「バカというより天才だな、こりゃ」

ん？  
どうした？

「中はすげえぞ。たかが人間でここまでやるやつは久し振りだ。もうしばらく待ってこの陰陽師と会おう」

ダメだ。  
長居はしない。

「もったいねえな。こいつならオレさまを三年くらい封じれるだろうな。対峙してみたい」

三年だけか。

「あたりまえだ。オレさまは者の中でも特上の上の上だ。人間ごときにどうにかできるわけがない」

へえ、そりゃすごい。

「あ、ちげえや。1人だけどうにかできたな。でなきゃ、オレさまがてめえというわけがねえ」

ああ、師匠か。

「はん、あの豚野郎。生まれ変わってたら真っ先に食ってやる」

あっそ、そんなの今いいから。

本殿をどうにかしろ。

「あー。面倒くせえ」

何が？

「順番の組み合わせが多いんだ。ここまでやってるってことは半剥がしとかも混ざってるだろうなあ」

ぼやいてないで早く。

「わかった。本気出すぞ。八十%くらいな」

それは本気とは言わねえよ。

100%を本気って言うんだよ。

「100%出していいのか？」

ダメ。

無理。

ごめんなさい。

「はん、いくぞ」

あい。

「右、左半、上、天、下、地、左半、右、左側、右側、上、下、左半、右半……」

右の肩甲骨が沸騰してるか t こ思う程熱い。

左の心臓以外に右の肩甲骨の下に心臓があるかのように脈打つ。

左右の腕が人間の動きをしてなくて。

そして何よりも、人間の色をしていない。

「天、天、地、左、右、上半、下、下半、右、地、左、下、上、左、右半……」

口から出る音に合わせて腕が札を剥がしていく。

何重にも貼られた札をベリベリ剥がし、ついにその枚数が三百枚を超えた。

「左、上、天、下、右、下、天、左、上、地、よし最後の正面」

勢いよく上から下へ剥がす。

「終わったあ。あー、眠い」

ありがとう、助かった。

「礼なんていい。寝かせろ」

そこまで言って勝手に眠りだした。

あいつが眠ったことで、毒々しい色をしていた腕も元に戻り、身体の主導権を取り戻す。

(終わったか?)

「あ、おかえり。クダン」

あいつがいたから入って来れなかったのだろう。

クダンが元のオコジョの姿でこちらを覗いていた。

「さて、帰ろうか」

(どこへ?)

「さあ？」

終わった達成感なのか安心感なのかは知らないが、自然に笑みがこぼれた。

三本針の方位磁石と十六本針の懐中時計を見比べる。

「なあ、クダン。どっちか壊れてるっぽい」

(だから二つ持つなって言っただろう。我輩の助言をちゃんと聞かないからそうなる)

ツンとそっぽ向いてクダンは歩く。

「だって……」

(ガキじゃあるまい。だってクソもない)

ピシャリと話を打ち切られた。

札を剥がした後、空が暗いうちに町を出た。

引き止められるのはごめんだった。

一週間くらいして風のうわさで眠れる町が目覚めたと聞いた。

これでもう噂になることはないだろう。

後日談が聞けないのは寂しいが、噂になることをいうのは基本的によくないことだ。

だから噂にならなければ幸せにやってるだろうってことだ。

「ま、目的地があるってわけじゃないし。いっか」

青い空がなんとも気持ちいい日だ。

そうそう、獺が最後に渡してくれた葉は相当な代物だった。

一見普通の葉だが、いろいろ使い道があるとかで売人が見たこともない額で買ったがっていた。

でも、なんか。

もったいなくて。

そして、いざって時のために木箱に入れて持ち歩くことにした。

そのおかげか毎晩心地いい夢を見せてもらっていたりする。

(おい、あそこに町あるぞ)

「お、本当だ。じゃあ、クダン。あそこまで競争な」

(我輩に勝てるとても?)

不敵に笑うクダンを見つつ、走り出した。

掛け声があると思ったのかクダンも慌てて走る。

走って、走って。

ひたすら、ただただ走った。